



京大病院広報

KYOTO UNIVERSITY HOSPITAL NEWS

京都大学医学部附属病院 広報誌 【京大病院広報 第100号】 2013年5月発行

特集

Close Up

先進医療開発を加速する
臨床研究総合センターを
開所しました。



京大病院の基本理念

- ① 患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する。
- ② 新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する。
- ③ 専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する。

京大病院広報

KYOTO UNIVERSITY HOSPITAL NEWS

2013.05
vol.100

CONTENTS

■特集Close Up①
最新ニュース・
先進医療開発を加速する
臨床研究総合センターを開所しました。

■特集Close Up②
スペシャリストインタビュー・
がん看護専門看護師
大内 紗也子 副看護師長

■医 Medical
最先端医療シリーズ/呼吸器外科・
患者さんの体の負担を軽減するロボット支援胸腔鏡手術
iPSスペシャル対談Vol.1・
京大病院iPS細胞臨床開発部 平家 俊男 部長
×
京都大学iPS細胞研究所 戸口田 淳也 副所長

■交 Communication
京大病院トリビア 01・
八重と共に新島襄を看護した
初代看護婦長・不破ユウ

■読むクスリ・
お薬を正しく、
効果的に服用していただくために。

■楽 Interest
今日の「京の食事」・
旬の野菜をたくさん食べて、
この夏も元気に過ごしましょう。

■知 Information
トピックス・



特集 Close Up

①

最新ニュース

先進医療開発を加速する 臨床研究総合センターを 開所しました。



京都大学医学部附属病院では、臨床研究のさらなる体制強化をめざし、既存の3センター及び1部門を統合した「臨床研究総合センター」を開所しました。

ついでに去る4月15日にオープニングセレモニーを開催しました。

国際水準の臨床研究を推進するセンター。

難病で苦しむ人たちの治療に欠かせない革新的な医薬品、医療機器の開発。そのためにはさらなる臨床研究の進展が必要です。京都大学医学部附属病院(京大病院)では、これまで臨床研究の推進を目指したさまざまな取り組みを行ってきました。

そして2012年に、厚生労働省から関西で唯一「臨床研究中核病院」に選定されました。臨床研究中核病院とは、国際水準の臨床研究や、医師主導の治験を進める上での医療機関のネットワークの拠点となる病院です。全国5施設のうち1施設に選ばれた京大病院では、臨床研究の体制を強化するため、2013年4月1日に「臨床研究総合センター」を開所しました。既にあった探索医療センター、治験管理センター、医学研究科EBM研究センター、医療開発管理部を統合し、新たに誕生したセンターです。細分化された縦割りの組織ではなく、各部門の機能をまとめひとつの組織にすることによって、先端医療の臨床研究を加速し、新薬の開発を効率的に進めることが可能になります。

本来、日本では各大学や研究所で優れた基礎研究と企業による高度な開発研究が行われてきましたが、先端医療開発では欧米諸国に立ち遅れています。その理由のひとつが、研究を臨床応用化するためのシステムが整備されてこなかった点にあります。

今回京大病院が立ち上げた「臨床研究総合センター」は、日々の臨床や治験での成果を検証し、改善を目指して既存の医療の再評価を行うと同時に、新薬や新しい医療機器を生み出す創業に取り組みます。そこには、医師はもちろんのこと、統計やデータ管理、そして医師と患者さんの間に立つCRC(治験コーディネーター)といった専門家を含むチームをつくり、欧米並みのスピード感を持って臨床応用を進めていきます。さらに他の医療機関とのネットワークを築き、西日本の複数の大学病院と協働し、創業のシーズを現実化する支援体制も作ります。日本の医療イノベーションの進展と世界に通用する医学エビデンスの構築に貢献し、難病に苦しむ患者さんへ1日も早い先進医療の提供を目指します。



ゲストを迎えオープニングセレモニーを開催。

「臨床研究総合センター」の開所にあたり、京大病院は2013年4月15日(月)、京都大学医学部芝蘭会館においてオープニングセレモニーを開催しました。

まず主催者を代表し、京都大学医学部附属病院 三嶋理晃 病院長からあいさつがありました。日本の臨床研究が欧米に立ち遅れている現状を鑑み「厚生労働省が臨床研究中核病院の構想を立てられたのは卓見だと思います」と語り、本センターがそのけん引となること、そして他大学の研究施設や企業と連携することの重要性について述べられました。

続いて京都大学 松本 紘 総長が「大学を代表して、お祝いとお礼を申し上げます」とあいさつをされました。「京都大学には素晴らしい研究のシーズがあり、他大学や企業の研究所にもシーズがたくさんあります。それらをネットワークするこのセンターで新しい医療を開発し、1日でも早く難病に苦しむ人に提供できると期待しています」と述べられました。

次に来賓を代表し、厚生労働省 医政局 研究開発振興課 山田雅信 治験推進室長にご臨席賜り、原 徳壽医政局長のご祝辞を代読、披露されました。その後は京大病院 旧探索医療センター長から臨床研究総合センター長に就任された上本伸二 副病院長から、本センターの概要と取り組みについて説明がありました。

続いてはジャーナリストの鳥越俊太郎氏をゲストに迎えてのトークセッションです。「臨床研究推進の必要性」をテーマに、本センターの川上浩司データサイエンス部長による進行で、熱のこもったトークが繰り広げられました。4回の大腸がん手術を経験し、メニエール病を患う鳥越氏は「幾多の難病のメカニズムを解明し、治療法を見つけ出し、臨床研究によって一人でも多くの方を救っていただく、そういう期待が持てるんじゃないかと感じています」と、本センター開所への手応えを語ってくださいました。

閉会のあいさつは、本センター 清水 章 副センター長・開発企画部長です。「統合のメリットを大いに活用し、発展させていきたいと考えています」と語り、「本日、鳥越さんのお話をうかがったことで、私たち医療者は改めて初心に戻り、本センターにおいて新しい医療の開発・改善に向かって邁進してまいります」と力強い決意の言葉で締めくくりました。

京都大学 臨床研究中核病院構想 シンポジウム、開催。



京都大学医学部附属病院は、去る2013年2月9日(土)、国立京都国際会館において、「京都大学 臨床研究中核病院構想シンポジウム」を開催しました。厚生労働省選定の「臨床研究中核病院」として、本院は今後臨床研究を進める上で何が課題で、どのように解決していけばよいのか。今回のシンポジウムでは国内外から医療関係に従事する多数の講演者を招き、貴重な研究成果や現場の検証結果を発表していただくことで、得られるさまざまなアイデアを臨床研究に繋げていくことが目的でした。海外の研究者や本院を含む4つの臨床研究中核病院の代表者による講演が中心のメイントラック。そして、講演とパネルディスカッションにワークショップも含む2つの分科会。当日の会場には医療関係者はもちろん、一般市民からも数多くの参加者があり、臨床研究に寄せられる関心と期待の大きさが改めて確認されました。



特集
Close Up
2

スペシャリスト インタビュー

専門看護師としての知識を 多くの患者さんに還元したい。

特定の専門分野の知識や技術を持ち、日本看護協会の認定を受けた「専門看護師」。

京大病院では、さまざまな分野の専門看護師が活躍しています。

今回はがん看護の専門看護師である大内紗也子 副看護師長にインタビューしました。



がん看護専門看護師とは

国立大学病院として日本初の「京大病院がんセンター」を立ち上げた当院では、高水準のがん医療の提供や患者さん中心のチーム医療の実現に取り組んでいます。その中でがん看護の充実に重要な役割を果たしているのが、がん看護専門看護師です。がん看護専門看護師とは、日本看護協会専門看護師認定審査に合格し、がん看護の分野で卓越した実践能力を持っていると認められた看護師。看護系大学院修士課程修了者で、実務研修通算5年以上など、認定には厳しい条件・審査があります。

お話を伺ったスペシャリスト

がん看護専門看護師

大内 紗也子

積貞棟3階 副看護師長

兵庫県立看護大学卒業後、虎の門病院で5年勤務。同病院を退職後、兵庫県立大学大学院に入学。卒業後2009年に京都大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科に入職。2010年に、がん看護専門看護師の認定を取得。



専門教育を受けたことで 私自身の葛藤が減りました。

患者さんには、がん看護の専門看護師についてこんな風にお話します。「がんのことを勉強してきたので相談してください。一緒に考えられます」と。資格の有無ではなく、自分の知識・スキルを患者さんにどれだけ還元できるかが大切だと思ってます。私自身、専門教育を受けてきたことで、葛藤がずいぶん減りました。患者さんの反応を知識体系で考えられるようになったからです。例えば患者さんの気持ちが安定しないときは、今の状況が悪いからこういう反応になっているんだと考えます。100%満足できるということは少ないですが、以前より冷静に物事を考えたり、判断できるようになったと思います。

がん看護の専門看護師は東京・大阪に数十人、京都には2013年4月現在9人しかいません。資格取得後も更新が必要で研修の受講などスキルアップが求められ、多忙な職場の理解を得るのは、なかなか難しいのです。幸い京大病院の看護部は理解があり、研修への参加もサポートしてもらえます。進化が著しいがんの世界についていくため、私もいろいろな研修に参加しています。

とはいえ私一人ですることには限りがあります。専門知識を多くの患者さんに還元するには、スタッフみんなのスキルアップが欠かせません。教育も私の大切な仕事だと思っています。

がん看護の質を上げるため 研究会を開催しています。

私が京大病院に入職した2009年のがん看護の専門看護師が2人になり、がんの化学療法の認定看護師や緩和ケアの認定看護師など、がん看護を専門とする看護師が8人になりました。そこで8人が講師となり、看護スタッフを対象に研究会を立ち上げました。「京大がん看護研究会」です。各講師がテーマを決めてレクチャーを行っています。

年に8〜9回、約30分の講義ですが、この30分がポイントです。仕事の後の開講なので、スタッフの体力や集中力を考えた時間設定です。疼痛コントロールや症状にどう対処するかなど、明日から

役立つ実践的な内容が特長です。現場で今何が必要かを知っている私たち看護師が講師なので、若い人も積極的に参加してくれています。がん医療に力を注ぐ京大病院だからできる取り組みのひとつだと思います。

「京大病院がんセンター」では、医師、看護師、医療ソーシャルワーカーなど多様な専門職による「がんサポートチーム」があります。治療開始前の患者さんの心のケアや体の痛みの緩和など、患者さんが治療に立ち向かえるようサポートするチームです。まさに大学病院ならではの医療チームだと思います。血液・腫瘍内科病棟にいる私も、各患者さんについてがんサポートチームに依頼した方がいいのか、という判断に関わることがあります。医師だけでなく、患者さんの身近な存在である看護師、なかでも専門看護師としてトレーニングを受けている私が果たせる役割のひとつだと思います。

看護は学問として深められる 可能性の大きな仕事です。

私の願いは、たくさんの人に看護師になってもらうこと。看護は学問として深めていける仕事だと思うからです。病院勤務だけでなく、世界で活躍したり、将来患者さんになる人へ啓蒙したり、進み道は広いです。男性看護師が増えているのも心強いですね。看護師の教育において男女両方の視点がある方がいいなと実感しています。

私自身が看護師をめざそうと思ったのは中学生のころです。ケガをした妹を手術室まで迎えにいったときに、看護師の方の語りかけがとてもやさしく、心惹かれました。ところが看護の現場に入って5年目に東京の病院で血液腫瘍内科に異動になり、悩んでしまったのです。自分のやっていることが本当に患者さんのためになっているのかと。もう1度勉強し直したい、がん看護について学びたいと考え、大学院に進みました。

正直なところ、大学院での2年間は暗闇でした。なぜなら、そこに患者さんがいらっしやらないから。学問に打ち込む大切な時間ではありましたが、患者さんがいらっしやるからこそ、勉強しようと思うし、ステップアップしようとも思う。患者さんのそばにいたいと痛感しました。看護師の仕事のやりがいは、患者さんのそばにいられることだと思います。天職？そうかもしれませんね。





患者さんの体の負担を軽減する ロボット支援胸腔鏡手術



呼吸器外科 助教 佐藤 寿彦
呼吸器外科 教授 伊達 洋至

京大病院で2年前から臨床使用を開始。

ハイテク技術を搭載した医療用ロボット、ダヴィンチによる「ロボット支援手術」が注目を集めています。京都大学医学部附属病院（京大病院）では2011年4月から臨床使用を開始し、現在は週に2～3人の患者さんがこの手術を受けておられます。

ロボットといっても、外科医のようなヒト型ロボットが手術室に登場し、手術を行うわけではありません。外科医が操作する、精密・正確なマニピュレーターというのがより正確な描写です。外科医は患者さんから離れ、高精細の双眼モニターをのぞき込みながら人間の腕・指と同様の自由度を持つアームを操作して手術を進めてゆき

ます。手術後の痛みが少なく、患者さんにやさしい手術を可能にする、その最新術式をご紹介します。

痛み、出血が少ない 内視鏡手術の進化版。

1990年代から外科手術は大きく変化してきました。各領域で低侵襲化が進み、内視鏡手術の導入で患者さんの手術後の痛みが軽くなり、入院期間も短く済むようになりました。この内視鏡にはおおきく分けて2種類あります。1つは胃カメラのように、全身麻酔をかけることなく口や肛門などから体の中に挿入して検査・観察・処置を行うもの。主に内科医が担当します。もう1つは外科医が行う内視鏡、体腔鏡といわれるもので、胃カメラとは異なる内視鏡スコープを使い、全身麻酔で行います。これら体腔鏡手術は小さな穴から体の中をのぞき込んで手術するため、以前よりも患者さんの痛み、出血が少なく、喜んでいただいています。

ロボット支援手術はこの内視鏡手術の延長にあり、鉗子や鉋が自由に動くロボットアームに替わりました。またダヴィンチのスコープは双眼なため、人間の眼と同様に立体視が可能です。外科医はまるで患者さんの体の中に潜り込んでいるような感覚で手術ができます。

ロボットアームは手の震えを伝えることがないため、スムーズに細



かく複雑な作業が可能です。一方、ロボットアームは患者さんの体に入る場所は動かないように設定されているため、傷口の痛みが非常に少なく、内視鏡手術よりも患者さんの負担が軽くなっています。

従来の手術法と異なる特殊な手術ですが、内視鏡手術に熟練した医師が特別の訓練を受けて行うことが前提です。この手術を行う外科医は、厚生労働省および所属学会の指針に従ったダヴィンチの製造販売会社のプログラムに従って、特別なトレーニングを受けています。

呼吸器外科でもチームを編成。

京大病院では泌尿器科を中心に、産科婦人科、消化管外科、肝胆膵・移植外科、呼吸器外科、耳鼻咽喉科の関係診療科で構成するロボット支援手術委員会を設置。安全に手術ができるよう、病院補助のもとで臨床試験を行ってきました。

呼吸器外科では、伊達洋至教授と佐藤寿彦助教授の医師2名、看護師2名および臨床工学技士1名でロボット手術呼吸器外科チームを編成し、2011年12月から手術を開始。胸部領域では肺がん手術、縦隔腫瘍手術に承認が与えられています。

呼吸器外科でロボット支援手術を導入するメリットについて、伊達教授はこう語ります。



「呼吸器外科では肋骨と肋骨の間から手術をするのですが、そこには肋間神経があり、手術後の痛みの原因になります。しかしダヴィンチは肋間神経を痛めないようにデザインされているため、術後の痛みが相当軽減されます」。さらに医師にとってもメリットがあると伊達教授。「腰に負担がかかる前屈みの姿勢ではなく、座って手術ができ、3Dで奥行きがよく見えているので、手術がしやすく手ブレもありません。外科医の寿命が延びるかもしれません」。

佐藤助教によると「患者さんからはやっつてよかったという声が多く、術後の患者さんがずいぶんと楽そうなのがわかります」とのことです。京大病院呼吸器外科のホームページでは、患者さんのお話しを得て、術後のインタビューを載せていますのでご覧ください。

<http://www.thoracic-kyoto-u.gr.jp/>

ロボット支援手術を 受けていただくにあたって。

ロボット支援胸腔鏡手術は厚生労働省からの医療承認は下りているものの、保険収載されていないため、現在、医療費は患者さんの負担となっています。肺がん手術で約191万円、縦隔腫瘍手術で118万円のご負担です。手術の日に着用いただく衣服代金などを除くほぼすべての費用を含むとお考えください。2013年3月現在、肺がん手術は7例、縦隔腫瘍摘出術は6例を施行しています。

患者さんは手術の前日または前々日に入院いただきます。当日手術中はご家族に来院いただきますが、その後の付添は必要ありません。手術夕方から水分を取っていただき、翌日から歩行が開始となります。早い方で術後3～4日で退院となります。手術後は摘出した腫瘍の性状・進み具合などの病理検査結果を外来でご報告し、担当医と今後の治療について相談していただきます。

手術支援ロボット ダヴィンチS

ダヴィンチはロボット部と操作部、助手用のモニターなどで構成され、ロボット部には先端に鉗子やメスなどを取り付ける3本のアームと1本のカメラが装着されています。術者はケーブルでつながったコンソール（操作台）に座り、中に映し出される3D画像を見ながらアームを操り、患部の切除や縫合をします。



ダヴィンチを用いたロボット手術のメリット

- ①患者さんへの負担が少なく、入院期間が短縮できます。
- ②3次元(立体)画像で手術が行えます。
- ③人間の手首以上の可動域があります。
- ④手ぶれが全くありません。



緊密な連携で
様々な課題を
解決していきましょう。



京大病院とCiRAの共同で iPS細胞技術の世界へ。

京都大学医学部附属病院
iPS細胞臨床開発部長
平家 俊男
京都大学大学院 医学研究科 発達小
児科学教授。専門分野は免疫・アレルギー。京都大学出身。



京都大学
iPS細胞研究所(CiRA) 副所長
戸口田 淳也
CiRAの増殖分化機構研究部門の部門
長。京大病院では整形外科医として勤
務。京都大学出身。

京都大学医学部附属病院
iPS細胞臨床開発部

京都大学医学部附属病院(京大病院)に2011年12月開設。京都大学iPS細胞研究所(CiRA)と共同して疾患特異的iPS細胞研究を円滑に実施し、将来のiPS細胞を用いた再生医療を実現するための基盤整備を目的としています。「iPS細胞外来」と「品質管理技術開発室」の2部門があります。



2010年4月、京都大学に開設された世界初のiPS細胞に特化した先駆的な中核研究機関。iPS細胞の可能性を追求し、基礎研究に留まらず応用研究まで推進することにより、iPS細胞を利用した新しい医療を実現することを目指しています。所長は、2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授。

iPS細胞とは

2006年に誕生した新しい多能性幹細胞。人間の皮膚などの体細胞に、極少数の遺伝子を導入し、数週間培養することによって、様々な組織や臓器の細胞に分化する能力とほぼ無限に増殖する能力をもつ多能性幹細胞に変化します。人工多能性幹細胞(induced pluripotent stem cell:iPS細胞)と呼ばれています。

多くの方々のご支援に 心から感謝を申し上げます。

戸口田副所長(以下、戸口田):まずは京都大学 iPS細胞研究所(CiRA)への皆さまのご支援に、心からお礼を申し上げます。寄付という形で支援して下さる方や、私の細胞を使って他の方の研究に役立ててくださるとおっしゃってくださる患者さん、多くの方が、そして社会がCiRAを応援してくださっていることをひしひしと感じています。それはおそらく、CiRAの山中伸弥所長がいろいろな所で「iPS細胞技術を患者さんに還元したい」と想いを語り、その山中所長を信頼してくださっているからだと思います。

平家教授(以下、平家):そうですね。私も山中先生とは2011年に京都大学医学部附属病院iPS細胞臨床開発部を創設するにあたり、こんな風にお話しました。「CiRAと京大病院が手を携えて、一日も早く研究の成果を患者さんの元にお返ししましょう」と。iPS細胞臨床開発部が創設された当時は、2つの目標を掲げていました。1つは、患者さ



んの体細胞からの疾患特異的iPS細胞を作製すること、2つ目は、将来の再生医療への応用に向けた基盤整備です。そしてiPS細胞臨床開発部創設から1年半を経た今、基盤整備が進み、将来のためではなく、数年先の現実のものとして動き始めています。

CiRAと京大病院の医師が 連携を深めています。

平家:疾患特異的iPS細胞の作製にしろ、病気をお持ちでない方の組織から再生医療用iPS細胞の元を作るにしろ、患者さんの組織をいただく必要があります。CiRAにはそうした部門がないため、京大病院にiPS細胞外来という外来を開設しました。iPS細胞臨床開発部の1部門です。

患者さんの組織をいただく際には同意が必要で、これは各診療科でも行っていますが、iPS細胞外来では、CiRAの医師が継続的にご説明や採取ができるようにしています。なぜなら診療科では、「主治医の依頼だから」と患者さんがプレッシャーをお感じになることも考えられるからです。第三者的な立場でCiRAの医師が説明することで、患者さんにご安心いただけます。いずれの場合も京大病院で患者さんの情報の匿名化もきちんと行います。ただし現在のところ患者さんが直接iPS細胞外来を予約・受診することはできませんので、ご了承くださいと思います。

戸口田:主治医と研究者、両方の視点から患者さんに説明をさせていただくのは大切ですね。また、CiRAと京大病院の物理的な距離の近さもメリットが多いと思います。

ひとつのロールモデルを築き、 京都から、世界へ。

戸口田:iPS細胞と名がついた研究所も、iPS細胞外来と掲げられた外来も、世界にひとつしかないでしょう。今後もCiRAと京大病院との連携を一層強めていきたいと思っています。これまでは京大病院からCiRAへ、という流れが主流でしたが、できるだけ早く臨床応用にまで展開して、今後はCiRAから京大病院へという流れを作りたいと考えています。



平家: CiRAから京大病院への流れについては、将来的に再生医療用のiPS細胞を作り、臨床に展開するにあたっての整備が進んでいます。例えば、京大病院の「先端医療機器開発・臨床研究センター」内にラボを持っていただき、CiRAの研究者が、臨床応用を目指した取り組みを行って頂く場を確保しています。さらに将来iPS細胞の応用となったときに、治験、臨床研究が倫理的に問題なく行われるような体制を整備しつつあります。

戸口田:今まで世の中になかった細胞、それをどう取り扱うか、倫理的かつ法的な新しいレギュレーションが必要ですね。そのためにCiRAでは他の研究所とは異なる、ユニークなサポート体制を備えています。それがiPS細胞に関する様々な知的財産を管理する『知財管理室』、企業・研究者との契約を管理する『医療応用推進室』、iPS細胞

研究について正しく社会に伝えていくための『国際広報室』などの研究支援部門です。

平家:新しい医療を開発する場合には、規制のしかたや医療保険など、いろいろな視点で解決すべき課題が出てくると思います。だからこそCiRAと京大病院の緊密な連携によって個々の課題を解決し、ひとつのプロトタイプを築くことが目標です。こういう形なら患者さんにベターな医療を提供できる、そんなロールモデルを世界に示したいですね。

戸口田:ひとつのロールモデルになる可能性を持った恵まれた状況にありますが、そこに閉じこもるのではなく、世界中の研究にどう展開していくかが重要です。CiRAと京大病院のインタラクティブな関係の元で、シームレスに臨床応用が進む、そうした好例を京都から世界に発信していきたいと思っています。ただし、拙速は禁です。

平家:まさにそうですね。医療として定着するには、これからいくつかの段階を上がっていくかなければなりません。もちろん、登るべき価値ある山であることは間違いありません。



八重と共に新島襄を看護した 初代看護婦長・不破ユウ。



右下 不破看護婦長

人の成し得ないことを会得したい。

京都帝大病院(現・京大病院)の初代看護婦長(現・看護部長)を務めた、不破ユウ。新島八重と共に働き、新島襄を看護した女性としても知られています。ユウの生涯をたどると、日本の看護の歴史が見えてきます。

1870年生まれユウ(当時は北里ユウ)は、「日本の細菌学の父」と呼ばれた北里柴三郎の従妹です。明治初頭の日本にあって、自立を求める女性が進む道は、師範学校か看護婦学校しかありませんでした。ユウは京都看護婦学校に2回生として入学しました。

この学校は教育者・新島襄が創設し、国内では2番目の正規の看護婦養成施設でした。学校長は新島襄、病院長は米人宣教医ベリー博士、教師兼看護婦長はリング・リチャーズ。リング・リチャーズは、米国初の看護婦養成所の第1回唯一の卒業生です。米国で看護婦学校の校長を務めた後、渡英し、フローレンス・ナインゲールから直接指導を受けました。

リング・リチャーズから当時の最新の看護を学び、ベリー博士から医学を学んだユウ。後に恩師ベリーへの追悼文に、入学前の思いをこう表現しています。「人の成し得ないことを会得したいという信条に燃えていた」と。そして京都看護婦学校での学びを振り返り「単に技術的に看護法を修得したばかりでなく、人として世に処する上においての得難い尊いものを学びました」と記しています。

15年にわたり看護婦長を務める。

京都看護婦学校卒業後、ユウは群馬県前橋市に移り、牧師の不破唯次郎と結婚しました。この年、前橋市内で病に倒れた新島襄を妻の八重と共に看病したのが、ほかならぬユウです。1890年に神奈川県で新島襄を看取りました。

翌年、不破ユウは夫と共に京都に移り、母校・京都看護婦学校で教壇に立った後、新島八重と共に同志社病院で懸命に働きました。そして1899年に京大病院の初代看護婦長に就任します。以降15年にわたり、病院管理や看護師の育成にも力を注ぎました。退職後は訪問看護の先駆けである共栄看護婦会や、無料診療所日本健康会を興すなど、奉仕活動を続けました。新島八重に負けないほどのハンサムウーマンであったことが忍ばれます。1932年に新島八重を送った4年後、不破ユウは看護に捧げた生涯に幕を閉じました。



明治32年竣工 創立当時の附属医院玄関

お薬を正しく、効果的に 服用していただくために。



服薬時間を守りましょう。

最近の薬は効き目が強いことから、用法や用量を守ることがより重要になっています。最大の効果を得て、副作用を最小に抑えるために、正しい薬の服用方法をご紹介します。

服用にあたってまず大切なのは時間です。定められた時間を守らなければ、効果が弱くなったり、逆に強くなりすぎたり、また副作用が出やすくなることもあります。袋に書かれた服薬時間をよく確認してください。

「食間」と書かれている場合は、「食事と食事のちょうど中間の時間」と考える人が多いようです。例えば、7時に朝食を、13時に昼食をとる人なら、その真ん中の10時が服用時間だという捉え方です。しかし「食間」は、食事の影響を受けない時間、すなわち胃の中が空っぽで、服薬後もしばらくは食事をとらない時間帯のことを指します。目安は食後2時間です。

1日1回服用の薬は、いつ飲んでも良いものは少なく、ほとんどが一番良い時間帯があります。例えば、体の自然な生理を助けるホルモン剤は朝起きてすぐ、夜間に病気が進む潰瘍などの薬は夕食後が適しています。



お薬手帳を活用してください。

食後に飲む薬を1回飲み忘れた場合は、食後時間が経っていたとしても、すぐに飲むほうがよいでしょう。ただし「食直後」の服用を指示されている薬は、胃を荒らすこともあるため、軽く食べたり、水分をとってから服薬してください。また、次に服薬するまでの時間が短すぎると、薬の濃度が高すぎて効果が強くなったり副作用が現れやすくなるため、最低4時間以上は間隔を空けましょう。

複数の診療所から数種類の薬を処方されている場合は、気をつけたいのが薬の重複です。効き目が増強されたり、副作用が起こりやすくなることもあるため、ほかで投薬を受けていることを医師に伝えます。お薬手帳を提示すれば安心です。できればいつも同じ薬局で薬を調剤してもらい、薬の管理(履歴)をしてもらいましょう。

自分で薬の量を調整したり、自己判断で薬を服用しなかったり、という場合は治療を妨げることになります。薬の効き目が十分でないとい医師が勘違いし、量を増やすことで副作用が現れやすくなり危険です。指示された薬はきちんと服用し、気になることがあれば、医師や薬剤師に相談してください。

季節を感じてもっとおいしく!!

旬の野菜をたくさん食べて この夏も元気に過ごしましょう。

少しの工夫で
もっとヘルシーに



【チーム京大病院疾患栄養治療部】

北爪 綾子さん(左)、主任 辻 秀美さん(中)、副部长 幣 憲一郎さん(右)

野菜に含まれるビタミン類は季節によって変化します。

ビタミンや食物繊維が豊富な野菜は、生活習慣病予防に効果があるなど、健康づくりに欠かせない食材です。ところが最近では野菜の摂取量が減り、「平成23年度国民健康・栄養調査結果」によると、10年前に比べて全世代で野菜の摂取量が減少。特に20~40歳代は野菜不足が顕著です(グラフ1)。意識的に野菜を摂るよう心がけたいですね。

野菜を摂る際に注意したいのが、「季節によって野菜に含まれるビタミン類の含有量が変化する!」ということです。最近ではハウス栽培のものも多く出回り季節感が薄れていますが、「露地物」と呼ばれる旬の野菜には、その季節に必要なビタミンが豊富に含まれています(グラフ2)。旬の野菜を意識して摂取するよう心がけてください。

栄養豊富な夏野菜をおいしく食べるために。

今回は京都の地物を中心に、夏野菜の「そら豆」と「万願寺とうがらし」を取り上げます。

「そら豆」は、炭水化物、たんぱく質、カリウム、ビタミンB1・B2な

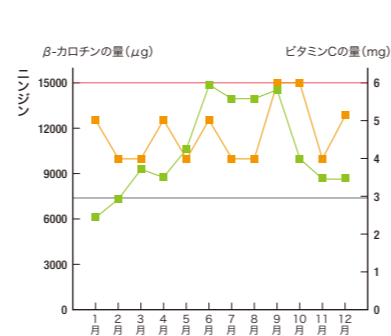
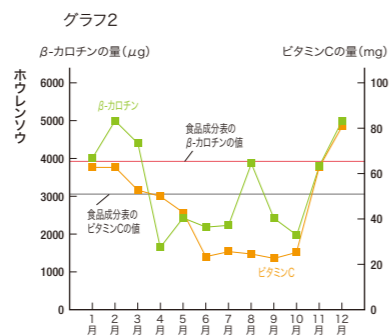
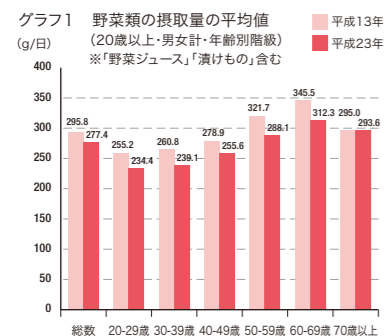


【今回使用する食材】

どが豊富で、小さな実栄養がギュッと詰まっています。特に糖質をエネルギーに変える時に必要なビタミンB1は、麺類など糖質の摂取が増える夏に欠かせません。夏場は特に積極的に豆類を摂りたいですね。おいしく食べるには鮮度が決め手。今回は独特の風味を生かしたパスタをご紹介します。

「万願寺とうがらし」は、京都府における「ブランド京野菜」のひとつで、ビタミンCや食物繊維、カリウムが豊富。特に万願寺とうがらしに多い不溶性食物繊維は、腸の動きを促し、便秘を予防します。今回は万願寺とうがらしを主菜にした料理をご紹介します。

3つ目は「梅」。6月に青い実をつけるこの野菜は、梅干しや梅酢などいろいろな食品に加工されます。梅干しは、クエン酸を多く含む防腐効果や食欲増進作用があり、食中毒や夏バテが心配な季節にぴったり。今回ご紹介するのは身近な「梅干し」を使った料理です。



長いものとオクラの梅和え



梅干しを味のアクセントにして、食欲が進む一品に。夏野菜のオクラと、歯ごたえのよい長いものねばねばコンビが、おいしいハーモニーを奏でます。お好みでわさびを入れても。

50kcal たんぱく質 1.9g、脂質 0.5g、食塩 0.5g

■材料(4人分)

オクラ 4本
長いも 200g(正味)
梅干し 2個
砂糖 小さじ1
醤油 小さじ1
鰹節 少々
とんぶり 30g

作り方

- 1 オクラをサッとゆでて、小口切りにする。
- 2 長いもは皮をむき、酢水にとった後、さいの目に切っておく。
- 3 梅干しは種を取り、刻んでおく。
- 4 ③に砂糖、醤油をあわせる。
- 5 ④にオクラと長いもを加え、鰹節とあえる。
- 6 ⑤にとんぶりをまぜる。



【取材協力】 ももてる

京都市下京区綾小路通堺町西入ル綾材木町197-1

そら豆とエビのクリームパスタ



ゆでると鮮やかなグリーンになるそら豆は、初夏のイメージぴったりです。エビのレッド、リボンパスタのイエローと、3色そろった目にも楽しいひと皿。お鍋ひとつでできるのも魅力です。

505kcal たんぱく質 23g、脂質 21g、食塩 1.9g、ビタミンB1 0.3mg

■材料(4人分)

そら豆 200g(約40粒) 塩 5g
リボンパスタ 240g 粉チーズ 10g
むきエビ 12尾 黒コショウ 少々
牛乳 100ml
生クリーム 100ml
バター 30g

作り方

- 1 サヤからそら豆を取り出し、内皮もむいておく。
- 2 リボンパスタは、袋の表示量の塩を入れ、表示時間の2分前にそら豆とエビをいれる。
- 3 パスタをゆでている間に、牛乳、生クリーム、バター、塩をボールに入れて湯せんにかける。
- 4 茹で上がった②をすべてザルにあげ、③に加える。
- 5 ④に粉チーズを入れ、全体をしっかりとからめる。
- 6 好みで黒コショウをかける。



万願寺とうがらしのとり肉詰め



万願寺とうがらしに牛ひき肉を詰めて、和風のおだしでさっぱりといただく料理。しょうがの風味が食欲をそそります。あんかけなので煮くずれしにくく、食べやすいのがポイントです。

256kcal たんぱく質 17g、脂質 12g、食塩 2.5g、食物繊維 2.9g

■材料(4人分)

万願寺とうがらし 8本 しょうが 2かけ
白ねぎ 2本 水 100cc
卵 2個 片栗粉 小さじ2
パン粉 1カップ だし汁 4カップ
牛ひき肉 200g (塩6g、醤油小さじ2、
小麦粉 少々 みりん小さじ2)

作り方

- 1 万願寺とうがらしをたて半分に切り、種を取り除く。
- 2 白ねぎをみじん切りにし、卵、パン粉を入れて全体をまぜる。
- 3 ②に牛ひき肉を入れ、ねばりが出るまでよくこねる。
- 4 万願寺とうがらしの内側に小麦粉をまぶし、③のタネを詰める。
- 5 熱したフライパンに肉の面を下にして④を並べ、中火で焼く。
- 6 焼き色がついたら裏返して弱火にし、だし汁を加える。
- 7 10~15分、万願寺とうがらしがしんなりするまでコトコト煮込む。
- 8 仕上げにしょうがをすり入れて、水溶性片栗粉でとろみをつける。



がんセンターに「がん薬物治療科」を新設



がん薬物治療科長
武藤 学

京大病院がんセンターのアクティビティー発展を目指して

2013年4月に、京都大学医学部附属病院がんセンターに「がん薬物治療科」が新設されましたので、ご紹介を兼ねてご挨拶させていただきます。がん薬物治療科の設置は、昨年9月に医学研究科に「腫瘍薬物治療学講座」が新設されたことを受け、京大病院がんセンターにおける診療科として機能させることを第一の目的としています。「がん薬物治療科」新設にあたっては、三嶋理晃病院長をはじめ病院執行部の皆様ならびに院内各部署の皆様のご尽力のおかげであり、この場を借りて深謝いたします。

さて、ご存じのように、我が国の死因の第一位は「がん」であり、今や国民の2人に1人ががんに罹患し、3人に1人ががんでなくなる時代において、がん医療に対する国民の関心も高く、大学病院としてもその期待に応える必要があります。特に、近年のがん医療における進歩はめざましく、発がん機序の解明、早期診断技術の開発、抗がん薬・外科手術・放射線治療技術ならびにこれらを組み合わせた集学的治療の進歩、また抗がん薬の副作用に対する新たな支持療法や緩和医療の普及など複雑化かつ多様化していますので、京大病院がんセンターに求められる使命は高いレベルであることは自明です。

京大病院がんセンターは、外来がん診療部門におけるユニット制外来、入院がん診療部門における集学的がん治療、がん診療支援部門におけるがんサポートなど、それぞれが専門的かつ有機的に機能しています。また、がん領域以外でも大学病院として高度な医療を提供できる体制により、合併症症例や副作用発生時にも迅速かつ確な対応ができることはきわめて重要です。これらの視点からみて、京大病院がんセンターは、おそらく、我が国のがんセンターとしてはもっとも成功している施設のひとつと言っても過言ではありません。このアクティビティーを維持し、さらに発展させるためにも「がん薬物治療科」に期待された責務は大きいと考えています。

安全・効果的な治療の実践を職種横断的に支援

実際のがん薬物療法においては、各診療科が標準的治療はもちろん専門性を生かした高度な治療を実践しています。また、分子標

的薬の登場により、これまで臓器別の治療であった時代から、分子変化を指標にした治療の時代になりつつあります。同時に、新しい有害事象への対策や支持療法の標準化など、新しい課題も出現し、医師のみならず、看護師、薬剤師などとのチーム医療が必須になっています。このような現状のなか、「がん薬物治療科」は安全かつ効果的ながん薬物治療が実践できるよう診療科および職種横断的に支援していく体制を整備していきたいと考えています。

また、がん薬物治療は、入院治療や外来治療、そして有害事象発生時の救急対応や緩和ケアも含めたシームレスな治療を行うことが理想です。そのため、これまで外来での抗がん薬治療に特化していた外来化学療法部門の機能を発展的に解消し、包括的ながん治療の実践ができるよう整備を進めています。

ハブ診療科となって人材育成にも貢献したい

がん薬物治療科が新設された意義としては、研究面そして教育面でも意義があると考えています。研究面の柱の一つとして、世界をリードする本学の基礎研究成果をいち早く臨床応用するため、first in man試験やfirst in class試験などの早期開発も実施できる体制にしていきたいと考えています。教育の面では、現在不足しているがん薬物療法専門医の育成が、院内のみならず、院外からも求められるところであります。その資格取得には、血液、乳腺、呼吸器、消化器等幅広いがんの診療実績が必要ですが、大学病院には様々ながん症例が集まるため、実際の患者さんに関わりながら勉強するon the job trainingに恵まれた教育環境にあります。一般に臓器別診療科になっている大学病院では、複数の診療科にまたがるがんの診療研修は困難なことが多いのですが、幸い、京大病院がんセンターでは、診療科横断的な診療体制ができていますので、「がん薬物治療科」がハブ診療科となり、がんプロフェッショナル養成基盤整備事業や短期研修制度などを生かし、院内外を問わずがん薬物療法専門医希望者を受け入れ、人材育成に貢献していきたいと考えています。

最後に、現在のがん治療は、治療成績向上や管理の面で一つの診療科での対応ではなく、多くの診療科や部門、職種の協力が必要な時代になっています。また、成人病などの合併症を有する患者の割合も増加しているため、これらに対応できる総合的な診療力が求められています。新設された「がん薬物治療科」においては、各診療科や各部署の皆様と連携をしながら、患者さんとその家族のため、そして京大病院がんセンターの発展のために精進してまいりたいと思いますので、どうかよろしくお願ひ申し上げます。

第7回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を開催

1月25日(金)に、京大病院iPS細胞・再生医学研究会を芝蘭会館にて開催しました。同研究会は、当院におけるiPS細胞、ES細胞及び体性幹細胞等を用いた再生医学研究の向上並びに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に発足したものです。第7回目となる今回の研究会では、学内外から110名余りの参加がありました。

研究会では、三嶋 理晃病院長の開会挨拶の後、篠澤 忠紘先生(武田薬品工業株式会社 医薬研究本部薬剤安全性研究所)より「ヒトiPS細胞の薬剤安全性評価への応用—現状と期待される利用法について—」について、後藤 慎平先生(京大病院 呼吸



開会挨拶を行う三嶋病院長

器内科)より「ヒトiPS細胞を用いた呼吸器再生研究」について、長船 健二先生(京都大学iPS細胞研究所准教授)より「iPS細胞を用いた腎臓再生と新規疾患モデルの作製」について、江藤 浩之先生(京都大学iPS細胞研究所教授)より「ES/iPS細胞を用いた多面的心血管再生治療戦略」について一般講演が行われました。

引き続き、小寺 秀俊先生(京都大学理事・副学長/工学研究科教授)より「細胞実験用マイクロデバイスに関して」について特別講演が行われました。



小寺理事・副学長による特別講演

きさらぎコンサート 2013年を開催

2月27日に外来棟1階アトリウムにて、患者さんを対象に、きさらぎコンサートを開催しました。今回の出演者はピアニストの猪野元子さん、とオカリナデュオのSky-Noteを招き、演奏して頂きました。猪野さんより、チャイコフスキー「白鳥の湖」より5曲演奏頂き、美しい音色がアトリウム内に響き渡りました。また



ピアニスト 猪野元子さん
神戸女学院大学ピアノ科卒。在学中、関西フィルハーモニーと共演。97まで相愛音楽教室講師。99ジュネーブ音楽祭出演。00以降、京都フランス音楽アカデミー、ニース国際音楽アカデミーアジャクシオ音楽祭にてフェイ・セルメットのマスタークラスを受講。ROYAL OAK HOTELにて「白鳥の湖」全幕順次演奏中。

Sky-Noteより、子ども向け、大人向けのポップな曲から心が和むヒーリングソングまで幅広く演奏頂きました。

バラエティに富んだ今回のコンサート。多くの患者さんに集まって頂き、盛会に終わりました。

※主催：京大病院(企画：患者サービス推進委員会)、共催：一般財団法人 和進会



オカリナデュオ Sky-Note
オカリナ吹きKnulpと、その仲間よまさ、の2名のユニット。Sky-Noteの意味は、天空のしらべ。アンデスの晴れた雄大な青空に、オカリナの音色が響き渡る様をイメージしたユニット名。



京大病院広報

KYOTO UNIVERSITY HOSPITAL NEWS

ご寄附のお願い

京都大学医学部附属病院では、高度医療の充実発展、新医療の創生及び医学教育・研究を推進するため、寄附金を受け入れております。

詳細は、京大病院ホームページ <http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp> をご覧いただくか、
事務部経理・調達課産学経理掛 (TEL.075-751-3059) まで。

次代の医療を担う看護師になる。



〈看護師募集中〉

[URL]<http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp/~wwwkango/>



京都大学医学部附属病院 広報誌 【京大病院広報 第100号】 2013年5月発行
発行 京都大学医学部附属病院広報部会
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町54 FAX 075-751-6151
<http://www.kuhp.kyoto-u.ac.jp>

ご意見、ご感想をお待ちしております。
また、原稿の投稿も歓迎いたします。

wwwadmin@kuhp.kyoto-u.ac.jp